

## 相互点検・評価活動が及ぼす教育への効果

### ー現代的課題克服に共同で挑戦する「教育改革」の新しい切り口を求めてー

申請者 住吉廣行

#### 取組の概要 (400字以内)

松本大学松商短期大学部と湘北短期大学との間で継続的に行われている相互点検・評価活動は、1999年12月の正式調印から7年に及び、すでに多分野に渡る6回の報告書を出している。交換授業や便乗授業、協働授業を取り入れ、課題意識と学ぶ意欲を持たせる教育の創造に挑戦している。また学生の大学生活支援の取組でも、好奇心・広い視野・社会性の涵養等の面で好影響を与えている。

教職員間の理論的、実践的交流に止まらず、大学祭やリーダーズキャンプなど学生間の交流にも発展しており、相互点検の取組が「両校の学生参加による評価活動」という斬新な形態を採用しながら、実施されていることになる。

この取組は、相互点検・評価活動が『学生が抱える現代的課題』の克服に向け、具体的にどのような教育的効果を上げているか、「特色ある大学教育」の展開という視点から、『学生を中心に据えた教育改革の在り方』に対しても一つの方向性を提示するものである。

(取組の概要文字数： 399字)

キーワード：相互点検・評価、交換授業、学生参加、現代的課題、教育改革

#### 申請にあたって

今回のテーマは、第3回目の特色GPに湘北短大と共同で申請したものを修正したものである。教育内容への踏み込みが物足りないと言う理由で採択に至らなかった事から、弱点を補強しリベンジを果たそうと再挑戦を試みた。前回は共同提案と短大独自の二本の申請が可能であったが、今回はどういう形であれ各短大は一本の申請しか出来なくなってしまったため、本学が代表して申請することになった。しかし気分はあくまで共同申請というもので、申請内容は湘北側にも事前に送付しコメントも求めている。

本学では全国に誇れる内容が少なくとも3つはあると思っていた。「活発な地域交流」「手厚い学生支援」それに「密度の濃い相互点検」である。先ず一回目の特色GPで「地域交流」が採択され順調な出だしとなった。ところが「入学前から卒業までの手厚い学生支援」は四回目に「これは申請の代表者を変えて2回目(糸井)、三回目(住吉)、4回目(糸井)と三度も挑戦」ようやく採択されたが、思いのほかこずったという印象であった。そして最終の五回目は、この「相互点検」をテーマにGPを獲得して、有終の美を飾ろうという目論見である。

申請書に示した綺麗で見やすい図・表は広報課の田中雅俊・赤羽研太・片庭美咲、三氏の支援があって出来たものである。特に片庭さんには無理な要求を、短時間で手際よく処理していただき大変感謝している。また総務課の松田千寿子氏には原稿を読んでいただき、字数制限の中で短大側の思いが伝わる文章へと近づけることが出来たと感謝しています。

## 1 取組について

### (1) 取組の実施プロセス

大綱化以降、大学運営について規制緩和し、自己責任を強化するという考え方で、事前審査よりも事後評価が重視されてきている。まずは自己点検・評価が行われるようになり、次いで同一県内にはない別の大学との間で、相互点検・評価を行うことになった。さらに外部評価制度も取り入れられ、現在では第三者評価制度へとつながってきている。

このような背景のもと、第一ステップとしての自己点検・評価を終えた本学と湘北短大とによる相互点検・評価活動は始まった。最初の打合せ会合において直ちに「形式に拘らず、率直に意見を出し合える相手」であるとの感触を得て、「これなら意味のある交流ができる」との認識が互いに深まった。一方が困っていることを「どうしてますか」と尋ねても「このように考え、こんな対応をしている」といった、他方のストレートな回答に満足度は跳ね上がり、互いをもっと知り合おうという段階へと、とんとん拍子に進んだ。

両校とも教授会の下に組織化の要となる相互点検・評価委員会を構成し、「全学の教職員が携わる」「マンネリに陥らない」を念頭に置き、毎年異なる点検・評価分野を設定し（図1）、7年で6回の報告書を出している。年を重ねるにつれ教職員・学生からの前向きの要望や提案が出るようになり、交流の内容も広くかつ深くなってきている。この活動の螺旋的発展が、教育の現代的課題に、協力して果敢に立ち向かう基盤を形成してきている。

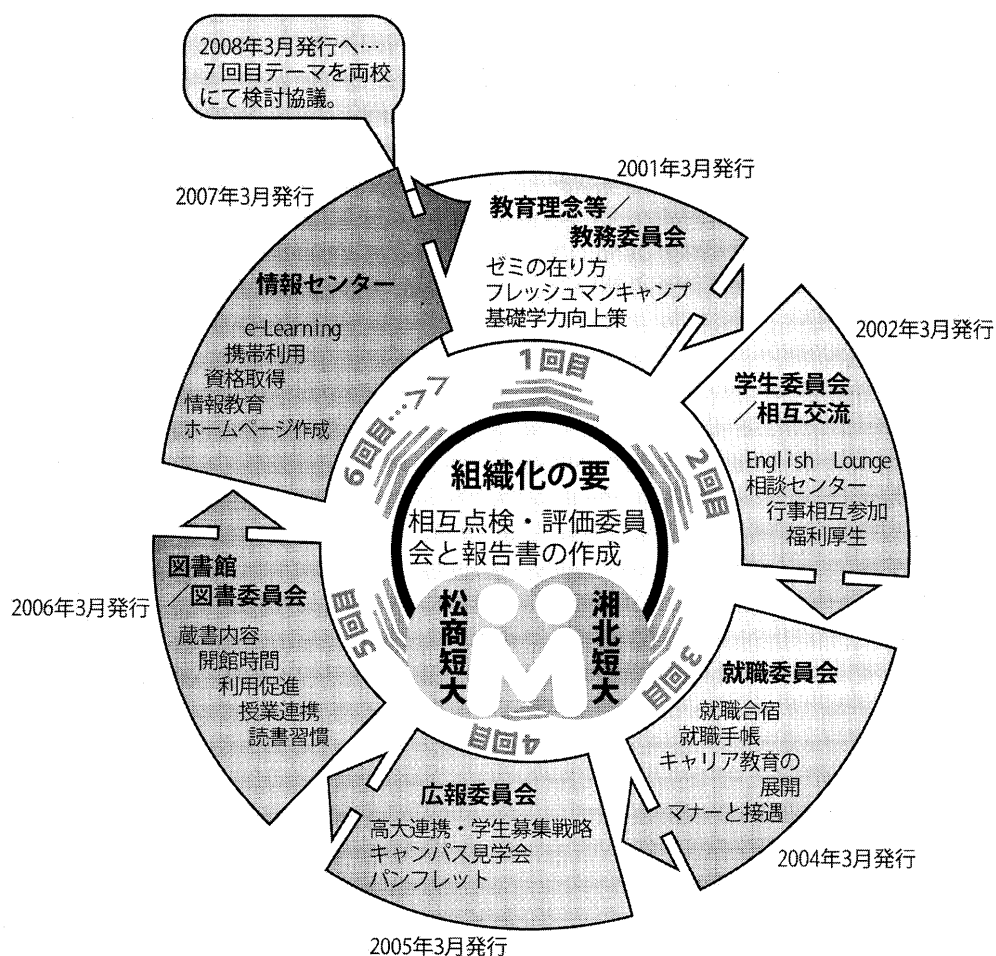


図1. 過去7年間、6回の相互点検・評価報告書の発行と組織的活動内容の一覧

## (2) 取組の特性

〔取組の特長〕 本取組は、次の(a)～(c)の3つの特長をもっており、図2がその全容を示す概念図(取組の特性、現代的課題の共通認識、取組の有効性と評価)である。

(a) 1つは教育内容の充実に関する特長である。それぞれの短大の人的・物的資源の制約の中で、①不備あるいは不足している要素・教育内容を補完し合える、②他校の得意とする有意義な取組を互いに利用することができる、③共通の教育課題を協力・協働して探求できる、等の理由から両短大の学生が共に優れた教育機会を享受できる。

(b) 2つ目は学生間の相互交流と自主的活動の活性化に関する特長である。同世代の異なる環境に育つ学生達が、①他大学の学生生活を身近に体験できるので、交流を通して切磋琢磨し、②新たな視点を獲得し、独創的活動の展開に挑戦するようになって来ている。

(c) 3つ目は相互点検・評価活動で教職員に芽生える教育改革への意欲に関する特長である。両校の教職員は、①「学生が抱える現代的な課題」を共通の認識として持っているため、②相手校の優れた課題克服の事例に刺激され、「自分達も何とかしよう」と教育改革への機運を盛り上げている。その姿勢が自校の学生への利益還元に反映している。

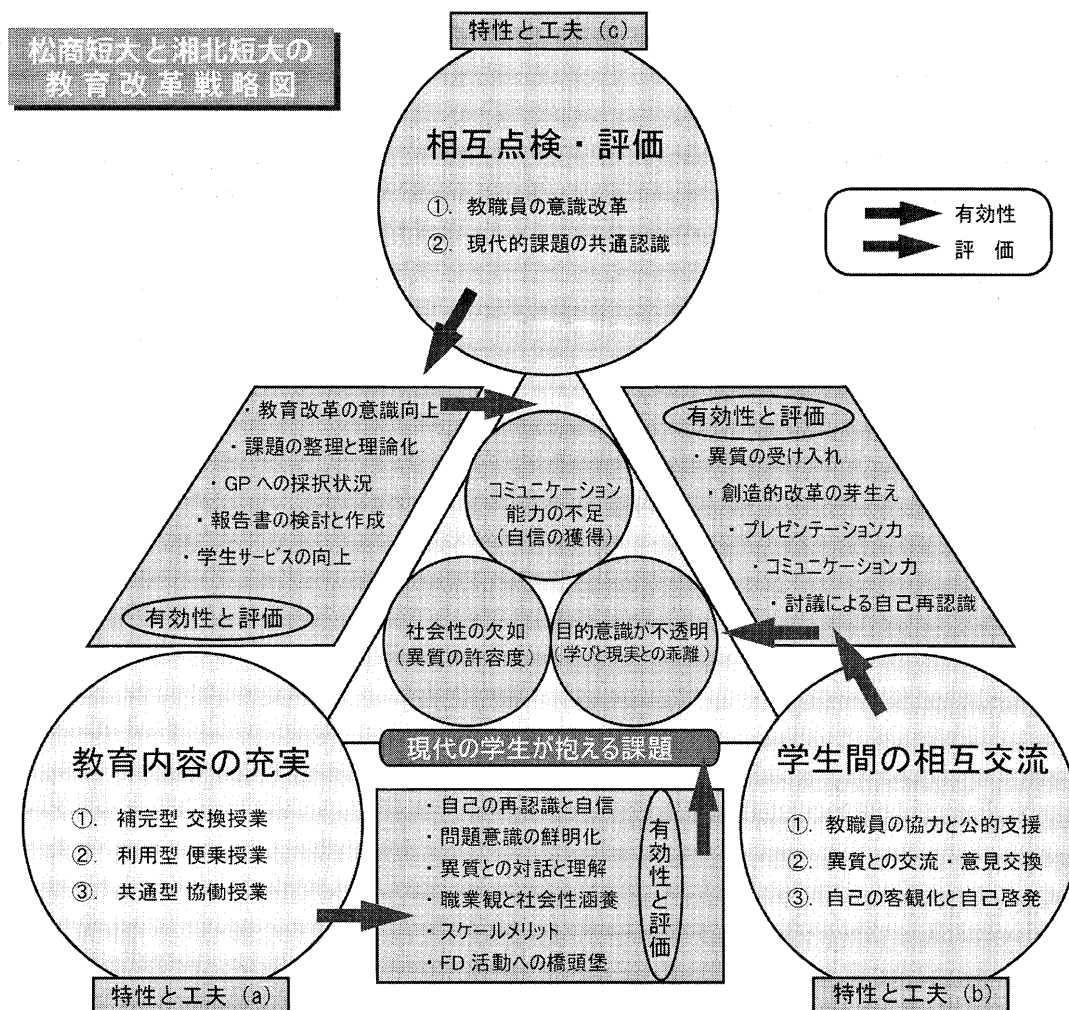


図2. 相互点検・評価活動を中心とした本取組の特性、有効性とその評価軸等の全容を示す概念図

【取組の工夫】さて、取組を通じて教育的効果を上げるためにどのような工夫がなされているかを、本取組の特長をなす3つのカテゴリー毎に具体的に説明する。

(a) 相互点検・評価活動が教育内容の充実に及ぼす効果を上げる3つの工夫

① 互いに不足分野を補完し合うという工夫（交換授業）

地域特性や歴史的経緯などの理由から、両校とも思うようには対応できていない課題がある。相互点検・評価校の利点を生かし、例えば観光分野についての交換授業を行い、不足する領域を補完しあっている(表1)。湘北で展開されるのは主に、**海**、大型レジャー施設が中心の都市型観光で、商業ベースでも脚光を浴び、全国的にも知られた形態である。それに対し松商では、**山**、農業や自然環境を中心に据えたエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムであり、それが地域の振興とどう係わるかを探求する観光を学んでいる。

こうした二つの異なる観光へのアプローチを、交換授業という形で「体験」し「意見交換」する中で、観光の在り方の違いを軸に、「都市と農村」「中央と地方」といった**社会的背景との関係**にまで迫り、望外の効果をあげた。特に**地方**にある松商生は、地域の財産であると教えられた緑の田園、豊かな自然環境がテーマの観光が、果たして他の人々に受け入れられるかどうかに一抔の不安を抱いていた。しかし、みずみずしいキュウリを囓り、採りたてのラベンダーを使って工芸細工をする時の湘北生の反応から、手作りでロハスが売りの観光にも将来性があることを確認でき、**自信を持てたことは大きな収穫となった**。

八景島シーパラダイスの観光経営戦略や安曇野ちひろ美術館の開館理念も、**両短大の人脈を生かし**、現地で責任者から直接学ぶことができた。双方の学生が相手校の受け入れ準備で、事前学習にも力を入れたため、その後の授業展開に大いに役立った。**都会**の湘北生は、「独自の観光の在り方を模索しつつ、地域での共同した取組を進める松商の方式」に**興味を抱いたことは**、松商生の卒業論文(資料3)等でも紹介されている。

補完内容	松商から湘北へ出向いての学習	湘北から松商へ出向いての学習
観光の対象	海辺、遊園地・テーマパーク、有名観光地、歴史や文化	山・川・自然、農業、食文化、新鮮野菜、地域文化、美術館
観光の在り方	商業化された都市型観光	グリーン・ツーリズム／エコ・ツーリズム
学びのテーマ	観光経営戦略(八景島) 布留川信行代表取締役の講演備 観光地と公共交通網の整	観光を通じた地域振興(安曇野) 松本猛館長の講演 民宿、温泉、農業等観光資源の連携

表1. 観光を中心とした「補完型」交換授業のテーマ

② 相手校の優れた取組に参加し、他方がそれを享受するという工夫（便乗授業）

一方の短大が豊富に経験を重ね、それをテーマに特色G Pにも採択されるような得意分野がある。それに他方の大学が「便乗」し、利用することによって、学生がより質の高い授業内容を享受できる可能性を切り開いている。これも例を挙げ内容を紹介する(表2)。

(イ) 例えば松商では地域連携を取り入れた教育が頻繁に行われ、その中で動機付け教育の一つとして、アウトキャンパス・スタディが展開されている。これを生かして、松商の金融論や銀行論の担当教員が湘北で同内容を講義し、**日本銀行へもアウトキャンパス・スタディに出かけたが**、これにより湘北生の金融機関への**就職意識も高まっている**。今後一步進め、若者の金銭感覚を両校の学生を対象に、使途・金額等で比較検討する予定である。

(ロ) 湘北では、語学研修、異文化交流がテーマの取組が、特色G Pに採択されている。オースト

ラリアから研修生が毎年30名近く来日する等、日・豪相互交流の広がりやソニー学園の経営ならではのものである。この取組に松商の学生が関わることで、異質文化の受け入れと習慣の違いの認識など、国際化社会への対応力を身につける上で貴重な経験ができています。これは地方の松商単独では実施が難しく、湘北に"便乗"し、実現できている。

(ハ) 他にも湘北が擁した元東京オリンピック銅メダリストの教員を招き、「夢を持ち一途に取り組むことの大切さ」を語っていただき、聴講したスポーツ好きの松商生は大いに刺激を受けた。これも一方の持つ財産を他方に提供している好例の一つである。

"便乗"内容と背景	松商の教育機会提供の例	湘北の教育機会提供の例
学習内容とその形態	金融論・銀行論 日本銀行へのアウトキャンパス・スタディ	オーストラリア語学研修 元オリンピック選手の体験に学ぶ
得意分野（特色GP）	地域連携の授業展開（03年度）	異文化交流/英語教育（04年度）

表2. 相手校の得意分野を取り入れた"便乗"型授業の展開

### ③ 共通のテーマ・企画に対し、協働して取り組むという工夫（協働授業）

(イ) 海外研修には、最低人数を確保できなければ実現できないという制約がつきものである。しかし、伝統ある湘北の計画に松商が相乗りできれば、たとえ少人数でも実施可能という利点が生じる。湘北側でも、参加者が増えれば経費が安くなり、松商生が同行すれば良い意味での緊張感も期待できる。必ずしも「一方向的便宜供与」の関係だけに集約されないと考え、共通の目的（経費と刺激）を持って協働することで継続的に実施されている。

(ロ) 簿記など資格取得を目指す授業では、今後共通試験の実施など競い合って効果をあげたい。教育手法の違いと成果との相関を協働で探求することは、FD活動にもつながる。

(ハ) 共通テーマのキャリア教育の面でも、湘北の教員が自校で行っている講義の一部を松商でも展開し、その手応えの違いなどを体験する試みが、新たに実施される予定である。

### （b）学生間交流の活性化を図る2つの工夫 ―異質との交流、自らを客観視する機会―

#### ① 教職員の姿勢を学生に伝え、公的支援もするという工夫

相互点検・評価を行うには、互いの状況を良く知り合う必要があると考え、当初教職員間で交流が始まった。両短大の「異質と交わる姿勢」は学生にも伝わり、学生間の交流も大学からの公的支援を受けて頻繁に行われている（表3）。両校間は遠距離で、通常の授業日では困難であるため、勢い交流は長期休暇や、連休、土日を利用して行われている。

#### ② コミュニケーション・プレゼンテーション能力と自己啓発とを連動させる工夫

学生間交流は、理念的な内容から具体的な行事に及んでいる（資料2）。前者はリーダーズキャンプ等で話し合われ、質問事項も事前に準備されている。後者には、学友会活動など自主的活動や、就職活動など大学が主催しそれに学生が参加する行事もある（表3）。

共同の話し合いの場では、「全く異なる教育システムで育つ学生」への分かりやすい説明（プレゼンテーション）が必要で、その過程で逆に自分達自身を客観視し、自己啓発の契機にもなっている。他大学からの素朴な質問へのやり取り（コミュニケーション）の間に、ことの本質が見えることもある。異なるシステムを採用しているが故に観察出来る利点や欠点。そうした交流の中での学びから、学生自身による創造的改革の芽が出てきている。

	松商から湘北の行事へ参加・交流	湘北から松商の行事へ参加・交流
学友会が企画、 主催する行事	箱根リーダーズキャンプ（9月） 湘北祭見学（10月）	春季体育大会（5月） 夏祭り松本ぼんぼん参加（8月） 梓乃森祭友情出演（10月）
短大側が企画、 主催する行事	海外研修事前研修交流会（8月） 英語スピーチコンテスト（11月）	就職合宿（2月）
教職員による 視察・表敬訪問	学長と誕生日を祝う会（随時） 海外留学生の受け入れ（12月）	創立記念行事（4月） 学生募集意見・情報交換（随時） 相互点検及びGPシナリオ（3月） 入学前教育（3月）

表3. 両短大間の交流（学生・教職員）が行われている企画・行事

（c）相互点検・評価を教育システム改善に反映させる工夫 — 現代的課題に挑戦 —

① 全教職員の意識改革を目指す工夫 — 具体的な改善の成果は資料1に —

相互点検・評価を行っている、相手校の優れた取組は否が応でも目に入り、「自校でも何とか実現できないか」と考えるのは当然の成り行きである。ここに教職員の意識改革を促し、自校の教育システムをどう改革するかを絶えず考える契機が存在している。

② 学生が抱える現代的課題についての一致した認識からスタートするという工夫

学生が抱える課題に、両短大はどうアプローチし、改善したかでその真価が問われる。先ずその課題とは何か、両校が共通して持つに至った認識を3つに纏める（図2 中心部）。

（イ）コミュニケーション力に欠ける。意気のあった仲間となら比較的気楽に話せるが、異なる文化を持つ者（世代、出身地域、国籍、性別等の違い）とのコミュニケーションが難しい。換言すれば自信を持って伝える内容に乏しい（それ故プレゼンテーション力にも限界がある）。

（ロ）社会性が欠如している。自己と他者、ルールや規範、市民道徳、思いやる心の問題等、多様な表現があるが、結局のところ異質の許容がどこまで可能かに迫り着く。

（ハ）学びと現実生活が乖離している。技術的学びと将来とを短絡的に結ぼうとするが、社会の複雑さを反映し難しく「何をして良いか分からない」「こんなことをして何になる」との表現で、「広がり」と「深さ」を求める教養的学びへの正面からの対峙を回避しようとする。

現代的課題の認識 → 解決へ向けての特色ある取組 → 有効性の確認 → 更なる展開

現代的難課題に立ち向かい、解決策を探り、学生を一步でも前進させようとして形成する上の螺旋サイクルが、本取組の底流にある「教育改革」への共通した考えとなっている。

（3）取組の組織性

相互点検・評価活動の組織的な要として、両校とも教授会の下に相互点検・評価委員会を構成し、打ち合わせ会議や相互訪問を必要に応じて繰り返しながら、1999年12月の正式調印以来、計6回の報告書（内容は資料1参照）を出している。その概要は前出図1の通りで、点検・評価項目は大学運営の全分野に及び、回を重ねる毎に充実してきている。

報告書の執筆は、各テーマに関係する部署が担当しており、取組の意義や価値は多数の教職員で共有できる。学生からも感想や意見等、寄稿を求めることも多い。学友会活動でも、事前の準備段

階での関わりも含めると、取組への参加者は相当数になる。つまり、**教職員に加え、両短大の学生参加型の組織的な点検・評価活動ができています**といえる。6回の報告書からは、全学的支援体制の下、いかに組織的活動が展開されたかが見てとれる。

要となる両校の相互点検・評価委員会の下で、学生の交流に関する部分は両短大の学生委員会、教育内容に関しては教務委員会が窓口となる。しかしそれ以外でも、学生同士の話し合いがまとまり新たな交流が始まる場合もあれば、教員同士のアイデア交換で現場から教務委員会へと逆に上がっていき、それが正規事業化される場合もあった。

#### （４）取組の有効性

本取組の特長（a）の教育内容の充実を図るという面では、教育効果を討議し意図しながらプランニングしていた。その中で有効性は、次のような諸点から確認・評価できる。

①安曇野を、松商生が湘北生を案内した後に行ったアンケート調査から、農業体験・農産物等を中心としたグリーン・ツーリズムが、将来の観光の在り方の一つとして成り立つことに自信を持ち、さらに環境問題とも結びつけて都市・農村連携による地域活性化の展望が開ける可能性に確信を持ったこと（資料3）等に現れている。逆に湘北生も、「**人間と自然や文化の共存を目指す観光**」というコンセプトに接し、具体的経験を通して都市型以外の観光が成り立つことを実感し、**観光を考える枠組・視野を拡げている**。

②オーストラリア語学研修では異文化圏での家庭生活で、習慣や民族性の違い、気象条件の違いによる生活様式の違い、食文化、動植物と気候の関係等、経験から多くを学んだ。言葉が十分には通じなくても、同じ**人間同士のコミュニケーション**が成り立つこと、人情や人間愛など人類としての共通点の存在にも気がついた。さらに親交が進み、ホームステイ先の家族が逆に松本を訪れ、伝統文化や雪景色を楽しむ等、**国際交流の橋渡し役の一翼を担う経験**も生まれた。こうした体験を経て、**日常生活での心のゆとり**も生まれ、初めての海外生活に不安を訴えていた学生が、「一人でもまた行きたい」と変化、成長している。

③他大学の教員から学ぶ金融・銀行論や日銀へのアウトキャンパス・スタディなど**現場での生きた学習**を通して、就職意識も鮮明になり意欲的な活動が展開できるようになった。

次に特長（b）の相互交流の活動という視点からの成果をまとめる（資料2）。

①まず何より学友会活動を進める上で、自らが課題と考えた事柄を異なる教育システムで育った学生同士が率直に話し合う機会を持ち、改善策を探るという**社会一般に通じる経験**を、何度も重ねたことが挙げられる。改善に至ったり、引き続き検討している等様々だが、コミュニケーション、プレゼンテーションは豊富な経験から、格段に上手くなった。

②更に一步進め、他大学の行事への参加・視察や友情出演など、両短大生が遠距離を、そして貴重な時間を厭わず、目的をクリアにして往来していることも、十分評価に値する。

このように特長（a）（b）に関連しては、一つ一つは必ずしも全学生が対象ではないが、取組が多様なため両校の多くの学生に《コミュニケーション力の向上、異質の受け入れ、自信の獲得、学びの発展、自主性の発揮等》で、有意の効果ができていると評価できる。

次に特長（c）に関連して、「相互点検・評価活動が教育システムの改善と教育効果の向上に、どのように影響を及ぼしたか」の評価・測定については、私達の基準は明確である。それは、当初目標とした「**学生の抱える現代的課題**」の解決にどれだけ迫れたかにある。

①例えば学生のプレゼンテーションや質疑応答の場での発言、答弁がどれだけ堂々としてきたか、困難と思えた課題への挑戦で自信の獲得が出来たか。他にも相互点検・評価報告書に学生の意見を掲載（学生参加の点検・評価）したり、広報誌、さらには卒業研究でも自らの主張を論理立てて発表できたか等、文章からも成長の跡を伺うことが可能である。

②両校の多彩な取組については、特色G Pなどに取り上げられたり、多様なメディアで紹介されたり、他大学からの見学や照会の依頼があるか等、対外的な注目度を一つの評価ポイントと考えている。幸い、湘北は過去4回中3度特色G Pに採択され、松商も2度採択された。必ずしも採択が絶対的な基準ではないが、全国的に見ても一定水準以上の立派な取組を行っていることにはなるだろう。相互点検・評価活動が互いの意識や教育内容のレベル向上に役立っているからこそその採択だと認識している。それだけに、相互点検・評価活動が持つ「教育活動の内容を向上させる潜在的パワー」にも、両校が確信を持っているだけでなく、広く公開してみたいと考え、今年3月共催でフォーラムも開いた。

### （５）今後の実施計画

#### ① 取組の実施計画を実現するための人的、物的、財政的条件の整備状況

本取組の教育的成果はこれまで述べてきた通りである。今後もその継続・発展を目指す。実施計画を具体化した主な内容が表4に示されている。財政的裏付けを除けば、相互点検・評価委員会の定期的な開催など、バックアップする諸条件はかなり整備されている。

継続（質的充実が目標）	発展（量的充実が目標）	新規に展開
<ul style="list-style-type: none"> <li>・交換授業の質的充実</li> <li>・観光（研修施設利用）</li> <li>・銀行論（金銭感覚調査）</li> <li>・海外語学研修</li> <li>・各種学生間相互交流</li> <li>・執行部討論会の企画</li> <li>・人的交流の充実</li> <li>・公開講座の分野拡充</li> <li>・相手校行事へ職員参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交換授業の量的充実</li> <li>・簿記、キャリア教育</li> <li>・ｽﾏｰ集中講義合同実施</li> <li>・共通テストの実施</li> <li>・共通テキスト開発</li> <li>・共通問題集の作成</li> <li>・相互点検・評価の普及</li> <li>・フォーラムの開催</li> <li>・教職員・学生の相手校留学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際交流事業の新たな展開</li> <li>・豪ニューカッスル大から英語教員招聘</li> <li>・湘北訪問留学生を松本へ招待</li> <li>・伝統文化体験（民芸、城、華・茶・書・棋道）</li> <li>・本学学生の留学支援ｼｽﾃﾑ充実</li> <li>・アジア系留学生を含む交流</li> <li>・湘北・松商・留学生合同ｽﾏｰ合宿</li> <li>・F D活動の合同実施</li> <li>・相互点検評価活動をまとめ出版</li> </ul>

表4. 本取組で今後実施される具体的内容の例

#### ② 取組の年度運用、取組期間終了後の展開

この取組は、特色G Pの採否に関わらず、継続的に行う意思は両校で確認されている。もし採択されれば、財政的な支援が付加的になされ、それを契機にさらに思い切った取組が年次を追って展開され、相互交流の頻度も上がり、質的向上もねらえる（表4）。その後、活動内容が両校の教職員の共同研究成果へと昇華される可能性も十分にある。

#### ③ 取組を検証し、改善に結びつけるシステム

これまでの活動を継続するとともに、以前に点検・評価した項目についても再度見直しを図り、学生の勉学生活のさらなる改善・向上を目指す。また今後の方策として、両校共同のF D活動へ踏み出せるように、新たなシステムづくりを考えている。



## 2 データ、資料等

### 資料1. 過去6回の相互点検・評価報告書の主な内容

1回目 の相互点検・評価活動では、(イ)ゼミの決定方法・時期、ゼミ制度の活用法、卒研の内容等について質疑応答がなされ「資格取得が目標のゼミ」も必要との認識を得た。(ロ)入学前教育、提出課題に基づく試験と、ゼミ決定や基礎学力向上との関連が討議された。(ハ)新入生合宿の時期と目的・内容も共通テーマで、改善へと結び付いている。

2回目 では、学友会活動、行事での相互交流を通し、(イ)学生の自主活動への教職員の関与、支援システムの在り方を探り、相談センターや学友会執行部の拠点が設置された。(ロ)会話力向上を目指す湘北のイングリッシュ・ラウンジを見て、松商もイングリッシュ・カフェを立ち上げた。(ハ)湘北では誕生日を祝い学長と学生の交流会が毎月開かれ、短大への要望も吸い上げていた。松商も直ちに実施し、後の目安箱設置へと継承された。(ニ)学生の「心と体の健康」に留意する健康センター機能の重要性を認識し、松商でもセンター設立へと動き始めた。(ホ)厚生施設の充実を図ろうと、湘北は松商の明るい雰囲気 of 4階ラウンジを参考に食堂の全面改組を行った。(ヘ)湘北生の松商体育大会、松商生の湘北リーダーズキャンプへの参加から、後の多様な交流が深まるきっかけを作った。

3回目 は就職活動支援がテーマとなった。(イ)湘北生が松商の就職合宿に参加しているが、事前事後の指導で湘北生の就職活動にも弾みがついた。(ロ)就職活動の円滑化を目指し様々なデバイスを松商が開発しているが、湘北では合宿体験学生からの「私たちもあれが欲しい」といった要求を受け改善された。(ハ)時には合宿参加の湘北生から「松商生の聞く態度が悪い」といった苦言をいただくが、それを利用して松商では内部の引き締めも図られている。(ニ)最近、松商が導入している入学前キャリア教育の見学にも発展し、学生の社会性を涵養するという共通課題に立ち向かうための学びを深めている。

4回目 は広報活動がテーマとなった。(イ)湘北の進んだ高大連携の取組を知り、松商が触発された。公私2校との部分的連携や頻繁な出前講義を経て、松商でも県教委が介在する形で、簿記教育を中心に、県立穂高商高と県下初の本格的連携が実現した。(ロ)キャンパス見学会等での学生ナビの育成も話し合われ、今では見学会の中心的役割を担っている。説明の仕方を学生の自主性に委ねた為、プレゼンテーション、コミュニケーション能力を磨く場となった。(ハ)県下の学生が多数を占める松商方式の募集活動と近県や地方も対象とする湘北の広域募集活動を相互に学ぶとともに、面談した生徒の動向によっては相手校の良さを紹介する所まで、協力関係は進んだ。(ニ)最近多くの生徒がホームページ(HP)を通してアプローチするので、魅力あるHP作成について経験を話した。

5回目 は図書館活動についてであった。(イ)貸出制度、開館時間など学生への便宜、返却の督促など具体的課題について専門家同士で話し合われた。(ロ)利用の促進、授業との連携、多様なサービス実施状況が交流され、学生利用率向上へとつながっている。(ハ)読書週間の設置で読書習慣を作り上げるといった戦術面での話し合いも有意義だった。

最近の第6回目 は、情報センターがテーマになった。(イ)e-Learningをはじめ、携帯電話を利用した情報伝達システム、ソフトの提供と管理、資格取得の支援体制、情報機器のメンテナンス等、学生へのサービス機能だけではなく、(ロ)教職員への支援、HPを含む全学情報システムの管理運営等にも及び、今後の課題について幅広く意見交換された。

ここで松商・湘北が互いに学び、それぞれのシステム改善へと導かれた事象を図表にして、年度を追う形式でまとめておく(次図参照)。

年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度
報告書発行	★	★		★	★	★	★
松商短大	湘北から学び得て 実施したプログラム ▼資格試験対策ゼミ導入 ▼「学長と語る誕生会」導入 学生交流による改善 ●体育局と学際局の事前打合せ合宿開催 ●リーダーズキャンプ開催方法改善 ●スポーツ大会種目の全員参加型移行 ▼「教養演習（プレゼミ）」導入	▼国際交流センター設置 ▼カウンセリング相談室設置 ●部局別リーダーズキャンプ実施 ●大型スクールバスの購入 ●キャンパス開催数増加 ▼履修要項掲載方法改善	▼English Cafe設置 ▼インターンシップ導入検討	▼グループ別指導実施 ▼入学前教育導入 ▼交換授業実施 ▼インターンシップ本格導入	▼高大連携事業実施	合同開催 特色G P合同フォーラム	
湘北短大		▼多彩な専門科目や講座を 設け選択幅拡大 ▼ゼミナールで就職や 生活指導のウェイト増	▼リベラルアーツ科目群を設置	▼就職ガイダンスの内容改善 ▼学生作成の就職マニュアル配布 ▼新学生ホール設置	▼キャリア教育を正規授業化 ▼交換授業実施		

図 相互点検・評価活動と両校の教育システム改善経過の概要

## 資料2 「相互交流の一環としての学生間交流」と「改善への学び」の内容

学生の経験交流から互いに学び、改善へと向かっている内容を次表に纏める。

学びの形態	湘北が学んだ内容	松商が学んだ内容
一方が他方を参考にし、改善を図ろうとしている内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学友会役員選出方式と代議制度</li> <li>・ゼミ対抗体育大会の在り方</li> <li>・学生による大学生新聞発行</li> <li>・活動計画・予算作成とその承認</li> <li>・地域行事・祭への参加の在り方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際交流委員会の活動</li> <li>・ボランティアサークルの活動</li> <li>・学科の枠を越えた活動方式</li> <li>・文化系クラブ活動の育成</li> <li>・他を受け入れる時の気配り</li> </ul>
両校が共通に学びあった課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リーダーズキャンプ開催方式</li> <li>・学生の要求実現と学友会活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学祭の運営やパンフレット</li> <li>・全国私立短大体育大会参加補助</li> </ul>

## 資料3 交換授業の経験をまとめた卒業研究など

交換授業は双方にとって有益な収穫がもたらされたが、今回は松商側の申請ということもあり、松商側からの出版物の資料を掲載している。こうした発表・出版活動は、松商では卒業論文発表会を開催し、優れた内容を全学生・教職員にも公表されている。

特に今回の内容は、部分的ではあるが地元のCATVでも放映され、地域の評判も良かった。

## 卒業研究

安曇野地域の観光について  
唐沢あゆみ

はじめに 自序

1 安曇野地域の観光について

2 安曇野地域の観光について

3 アンケートについて

4 アンケート結果と考察

5 結論

参考文献

謝辞

要約

目次

1 はじめに

2 安曇野地域の観光について

3 アンケートについて

4 アンケート結果と考察

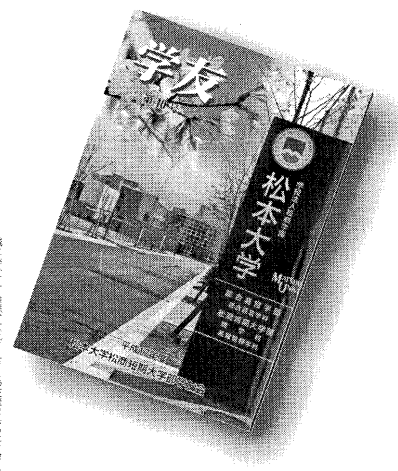
5 結論

参考文献

謝辞

要約

目次



雑誌「学友」に掲載された卒業論文